

翻訳

ギユンター・アイヒ作

## フィリドールの防衛手

新津 嗣郎  
竹中 克英  
共訳

声…アレクサンダー／リヒアルト／レベッカ／父親／母親／  
ニコデミ氏／判事／精神科医

—

リヒアルト フィリドールの防衛手だね。

アレクサンダー フィリドール？

リヒアルト 十八世紀フランスのチェス名人のことさ。

アレクサンダー それで、彼にちなんでこの初手がそう呼ばれて  
いるの？

リヒアルト もうそれほどよい手とは言えないけどね。黒は差  
し手が制限されるんだ。

アレクサンダー フィリドールか！ で、ぼくがチェスをはじ

めてまだ四週間だというのに、彼の手を発見したって  
うわけだ。

リヒアルト (差し終わってから) 君の番だよ。

アレクサンダー フィリドールなんて男を信じないな。

リヒアルト どういうことだい？ 彼のことはどんな本にも載  
っているんだぜ。

アレクサンダー 疑いを口にした途端に、誰かが本を持ち出し  
てくる、するとそこに書いてある、フィリドール、十八  
世紀フランスのチェスの名人ってね。

リヒアルト ぼくが彼のことをでっち上げたって言うのかい？

アレクサンダー 君じゃないさ。ともかくぼくはやつぱり十八  
世紀なんて信じないね。もちろん君は本を持ち出してき  
て、ぼくに示すことはできるさ、十八世紀、十七世紀の

後にして十九世紀の前の世紀だつて。みごとな説明だ。

リヒアルト 君が何のことを言っているのか、全然わからないな。ぼくらはチェスをするんだと思つてただだ。君の番だよ。

アレクサンダー あやしいな、ぼくが何のことを言っているのか、君にはちゃんと分かつていると思つていけど。

リヒアルト それじゃ試合にならないじゃないか。

アレクサンダー ごめん。それじゃ、差すぞ——差すぞ——  
(フェードアウト)

二

アレクサンダー ぼくは思はずかつとするところだつた。そのとき重要だつたのは、リチャードが全然疑いを抱かなかつたということだ。きつと、まるでチェスの試合に対する燃えるような関心がぼくを襲つたように実際には見えなにちがいない。リチャードはぼくらの学生チームのトップ・プレーヤーだつた。もちろんぼくなんか彼にとつてはゼロだつた、そして、彼が毎日午後をぼくのために犠牲にしてくれるというのも、十分疑わしかつた。ただ、ぼくは何も気づいていないふりをした。ほかの連中もどうやら何も気づいていないようだつた。彼らはしかも、ぼくがチェス競技をやっているのを見るのが好きだ

つたのだと思う。彼らはこの競技がぼくの自信の度合いを測るのに特に適していると考へていたようだつた。不当にもというわけではないが、どれほどの発明の才がこの特異な分野で動員されたことか、実に驚くべきことだつた。なんとという精妙な細工だ、何という科学の延長だ。しかも、すべてはじつに巧妙に考へだされていて、それに対する情熱を手に掴むことができるほどだ。全体がひとつの目的に従属する、などということが本当にあり得るのか？ それはきつと独裁じゃないのか？ これはたしかに誘惑的な考へだつた、そして、たとえぼくがそれに溺れることはなかつたにしても——欺瞞の世界に生きるすべれば、魅力的だつたかもしれない。ほかの連中がぼくのある情熱に気付く、だがぼくにはそんなものはない、ぼくにとつてすべてはそこにかかつていた。ぼくはまた、自分のチェスに対する関心の高さをリチャードに納得させるように努力しなければならなかつた。ぼくはもともとまだあまりたくさんのことを口にしたわけではなかつた。だから、彼が報告などする気にならなければいいのだが、と願つていた。

三

リヒアルト 王手！

アレクサンダー 王手？ ふむ。

リヒアルト 君は試合を安心して放棄してもいいよ。

アレクサンダー どうして？ ぼくは例えば歩をその間へ動かすき。

リヒアルト 何をやってもだめさ。王手！

アレクサンダー 正直言って、それを見落としてたな。

リヒアルト 王手になるまで試合を続けるのは初心者ぐらいだ。

アレクサンダー ぼくは初心者さ。(差す) どうぞ。

リヒアルト 王手！

アレクサンダー (差す)

リヒアルト これで詰み。

アレクサンダー もう一試合。今度はぼくが白だ。

リヒアルト もうできない。ぼくは数学の宿題をしなく

ちゃ——

アレクサンダー ナンセンス！ 復讐戦をさせてくれないのか

い。

リヒアルト 明日にしよう。どっちみち毎日やるんだから。

アレクサンダー もういやなの？

リヒアルト いいや、だけど——

アレクサンダー はじめろぞ。ぼくはこう差す。

リヒアルト はーん。(差す) つまり、インド式だな。

アレクサンダー インド式？ (高笑いをして) そいつはいい。

インド式ね！ つまりぼくはインド式をやってるわけだ。(彼の笑い声がフェードアウト)

#### 四

アレクサンダー 何という贅沢だ！ インド式、シシリア式、

カーロ・カン、アルガイアー序盤の手、トーナメント、名人、国際名人、大名人、世界名人があつた。しかも、すべて印刷されている。書籍、チェスの古本、轆轤細工、それどころか時計屋までもが動員されたのだ。もしぼくが疑ったりすれば、ポトヴィニクと名乗る男とか、アリエチンやカプブランカといった碑銘の刻まれた墓石を見せられたことだろう。これらの名前はでっち上げられたもので、はたして本物なのかといった疑念が生まれざるを得ない。これらの名前を聞いて、ぼくは感心しないわけにはいかなかった。なんとというでっち上げの才だ！もしぼくが時々わが偉大なる虐待者に出会ったとしても、彼に目配せすることぐらいはできたかもしれない。敵に対して払われる不遜な笑いと敬意。レーヴェンフィッシュ、ニムツォヴィツキ、キーゼリツキ。奇妙なのは、そう、もともと名前なんていうものはどれもありそうもないものだということだ。それともむしろ、そんなことは全然奇妙でもなんでもないのである。一旦そのことに気

づくと、レーマンという名前ほど奇妙なものはない。ぼくのクラスにもこの名前が三人いた。リヒアルト、これはチエスの選手だった、それにクルトとヴァルターだ。しかもこのバツとしないファーストネームには、当然いろんなものも隠されていた。ぼくは一度自分のファーストネームのことを妹と話し合ったことがあった。ついでながら、この会話はひどい戦術的失敗だった。ぼくの困難はこの会話からきている、とぼくはほとんど確信している。ところで、レベツカのことをどう考えたらいいのか、彼女がどっちの側についたのか、この間にぼくにはとづくに分かっていった。

## 五

アレクサンダー 一体ぼくの名前のことどう思う、レベツカ？  
レベツカ 満足してないの？  
アレクサンダー 満足しているか、してないか、——名前なんてぼくには全然どうでもいいことなんだ。  
レベツカ (ため息をついて) いいこと、わたしはアレクサンダーってとつてもすてきだと思うわ。  
アレクサンダー (軽蔑的に) とつてもすてき！ で、なぜぼくはそんな名前をつけられたんだ？  
レベツカ わからない。両親に尋ねたら！

アレクサンダー なぜぼくの名前はリヒアルトとかクルトとか、それともヴァルターじゃないんだ？ アレクサンダーなんてどうみてもふつうじゃないだろ、違うかい？  
レベツカ 別にそれほど変わっているわけでもないわ。兄さんはレベツカをどう思う？  
アレクサンダー 話をそらさないで！  
レベツカ ちゃんとまっすぐ進んでるわよ。レベツカをどう思うのよ？  
アレクサンダー おまえの名前は全然別だ。おまえがレベツカなのか、それともエルフリーデなのか——ああ、何てことだ！ そんなこと言い出したら、世界中の人間すべてのファーストネームを問題にすることだってできるさ。  
レベツカ そうするんだと思っただわ。  
アレクサンダー 違うんだ、ぼくらが問題にしているのはアレクサンダーのことだけだ。  
レベツカ わたしの大好きな兄さん、兄さんは本当にわがままね。  
アレクサンダー わがままか。ほかにぼくに何が残る。  
レベツカ わたしはいつも兄さんの味方をしてきたのよ。だから余計に腹が立つの。  
アレクサンダー とぼけるなよ、レベツカ！  
レベツカ 何のこと？  
アレクサンダー おまえはぼくが怪しいと思ってる唯一の人間

だ。ぼくはしょっちゅう思うんだ、おまえがいるから世界は存在しなくちゃならないんじゃないかって。これは誘惑だ。寸でのところであまくいきそうな方法だ。けど、いつもただ寸でのところなんだ。

レベッカ アレクサンダー、わたしの兄さん、大好きな、大好きな絶望的な兄さん。

アレクサンダー 愛、もちろん、そんなのは囷だ。で、ぼくは度々それに食らいつく、すると針がエラにかかる。もつともこれは単なる嘘えだけだ。魚の現実——なんたることだ、それもそれほど違ってるわけじゃない。それとも、全然違うのかな。恐ろしいのは、常に逆のことが言えるってことだ。

レベッカ 一体何の話をしてるの？

アレクサンダー またその質問だ。にもかかわらず、ぼくが何のことを話しているのかみんなにはわかっている。

レベッカ 何のこと？

アレクサンダー ぼくの名前のことさ。

レベッカ 両親は——

アレクサンダー 両親じゃなくて、おまえのことを言ってるんだ。

レベッカ アレクサンダー大王だと思うわ。

アレクサンダー やっと本題に辿りつたのかな？

レベッカ 本題なんて知らないわ。

アレクサンダー なぜアレクサンダー大王なんだ？

レベッカ それとも、アレクサンダー・フォン・フンボルトかも。

アレクサンダー 正直に言いなよ、かれのことは二番目に思いついたのだから。

レベッカ だったら、大王の方だわ。

アレクサンダー アイソス、ガウガメラ、ロクサーナ、で？

助けてくれ、レベッカ！

レベッカ (途方に暮れて) たぶん、たぶん——

アレクサンダー 三十二歳、そして死体は焼却された。

レベッカ そんなこと知らなかったわ。

アレクサンダー だけど、すべて何の手がかりもない。アレク

サンダー、都市の建設、東洋と西洋の統合、少年愛、ア

ジア女性との三回の結婚、芸術と科学、——ああ、レベッ

カ！

レベッカ たぶん、大王の方だわ。両親はみんな自分の子供に

なにか偉大なことを期待するものよ。

アレクサンダー あるいは、侮蔑をこめて、アレクサンダー小

王のつもりだったのかも。

レベッカ それとも優しさをこめて。

アレクサンダー (笑う)

レベッカ わたし、時々兄さんのことが心配になるの。

アレクサンダー そうかい？

レベツカ 兄さんのために何かしてあげなくちゃって。自分のためにだつて何をすべきか全然分かってないのに。

アレクサンダー おまえとぼくと同時に二人のために、何もかも白状しろよ！

レベツカ 兄さんが何を期待しているのか分からないわ。

アレクサンダー いつも言い逃れだけだ。同情への退却。そんなもの糞くらえだ。人はいろいろ経験をするけど、それ

らがいつも同じ経験だつてことに気づく。ぼくはおまえたちに無理強いしなくちゃならない。一言だつて自分から進んで語らないんだからな。そのことでぼくが苦しむ人間は、ただおまえ一人だけだ。

レベツカ 兄さんがわたしに腹を立てているとしか聞こえないわ。

アレクサンダー 猫のためのおしゃべりさ。

レベツカ わたしはそんなの始めなかつたわよ。

アレクサンダー にもかかわらず、もしぼくらが話しているのは窓枠のまだら猫のためだということが分つていれば、救いだろうにな。接続法を使った哀歌。いつもこのいまましい条件法、非現実話法、そいつがぼくの首にぶら下がっているんだ。

レベツカ かわいい、わたしのかわいい兄さん。

アレクサンダー 遅すぎるさ。ぼくはもう少し賢くならなくちゃ、日除けを下げてくれ。

## 六

アレクサンダー 確かに、ぼくはもつと賢くならなくてはならなかった。ぼくが何かを知っていることをもう示唆したりしないこと！ ほかの連中にだつたら役に立ったのだろうが、ぼくには無駄だった。全体としてみれば、レベツカとの会話はぼくの一番弱い時間だった。ここではぼくはほとんどお手上げだった。自分たちをぼくの両親だと呼んでいる二人との会話は、これよりずっと遡るが、その鋭さにもかかわらず、ぼくにはもつと無意味なものに思われた。いつさいの疑念を払拭できたのは、もつと後のぼくの態度によるものだった、とぼくは自分でも自負している。

## 七

父親 わたしにはどうも、アレクサンダー、おまえが最近ひどく避けているのが気になるのだが。

アレクサンダー そう？ 一体誰を？

父親 例えば、おまえの両親をだ。

アレクサンダー (皮肉をこめて) ぼくの両親をねえ。

父親 わたしたちはおまえの姿をほとんど見かけない、おまえはいつも新しい口実を作つて、食事にも現われない。

母親 わたしたちのことなどおまえにはどうでもいいっていう  
ような印象をほとんど受けるの、穏やかに言えば。

アレクサンダー 穏やかに言えば、ねえ。

父親 そろそろ一度話し合わなくちゃならないな。

母親 もう何ヶ月もおまえの口からは「おはよう」と「おやす  
み」しか聞かないわよ。ちよつと少ないと思わない？

アレクサンダー 十分だと思っただけ。

父親 さてさて——

母親 十八年間の心配と苦勞と愛、——これがそのお返しなの  
ね。

父親 わたしには、アレクサンダー、おまえが難しい年齢だと  
いうことは分っている。だからこそ、おまえに信頼して  
もらいたいんだ——

アレクサンダー 思春期のことだろ、分かっているさ。

父親 なにかつらいことがあれば、わたしたち二人かわたした  
ちのどちらかのところへおいで。

アレクサンダー 何もかももう百科事典で調べたさ。それに五  
年生のときに結構詳しい本が椅子の下でまわされてたか  
ら。セックスの説明なら結構だ。

父親 だったらいい、わたしの間違いだった。わたしはもしか  
したらもっと早くに——

アレクサンダー ああ、とんでもない！ 全然必要ないさ。

父親 いつになっても難しい問題だ。恥ずかしくて口に出せな

い、早すぎるんじゃないか、正しいのか間違っているのか  
分からない。

アレクサンダー ふたりとも全然間違っただけじゃないさ。

母親 分かるでしょう、アレクサンダー、手を差しのべ、代り  
に何かをだめにするんじゃないかって心配なのよ。

アレクサンダー ぼくの注意をそらすために、すばらしい話題  
を探し出したわけだ。

父親 注意をそらす。いったい何から？

アレクサンダー 二人の魂胆は分かっているさ。

母親 何を言っているの？

アレクサンダー スパイめ！

父親 スパイだと？

アレクサンダー そう言えば十分だろ、違うかい？ あんた  
ちはスパイだ。

父親 おまえが何のことを言っているのか分からん。ひよつと  
して、わたしたちがおまえを見張ろうとしている、って  
言うのかい？ アレクサンダー——これは親としての心  
配だ——

アレクサンダー 親、親だつて！ そんな言い方やめないか！

スパイする、それがあんたたちの唯一の任務だ！ しか  
も、あんたたちは自分のことをぼくの親だと言う！ 何

もかもなんてグロテスクなんだ！ その証拠にぼくに与  
えられたのがペニスだ、しかもそのペニスからぼくは小

便までする。ほら、その証拠さ。で、おまえが世の中を信じないとすれば、おまえは馬鹿だ。ああ、ぼくの両親、ぼくのことを心配してくれる両親！ ぼくに性生活の説明をする代りに、何もかもがナンセンスだと言いたがる。いい加減にして、わしらはおまえの親なんかじゃないって言えよ！ おまえは岩の裂け目から生まれてきたんだ、柳の木の穴から、捨て子で、玄関の前に捨てられていたんだって。コウノトリだったらまだしも信用できるだろうよ。あんたたちは、そう、金で雇われているんだ、ぼくを育てることがあんたたちの任務だった。だけど、高貴な生まれだとか、隠された罪とかなんていうおとぎ話はやめてくれないか。ぼくは目が見えないわけじゃない。岩の裂け目だろ、これがそうさ。だけどあんたたちは白状しない。石のことだっと思い出せるさ、ぼくの知っているのは暗闇だけだ。スパイめ！ 誰に雇われた？ あんたたちを軽蔑してやる、そうとも、ぼくはあんたたちを軽蔑してやるさ！ これが自分の両親のためにか示すことのできる最深の感情さ。

八

アレクサンダー しかし、それからぼくはまるで改心したように振舞った。監視機構が人々の心をすっかり占めてい

るのではとか、誰かあれこれの人の心に誤って愛の名残が住み込んでしまったのでは、といったことについてあれこれ考えるのをさっぱりとやめた。ぼくは従順な息子となり、信仰と希望と愛を偽装した。ぼくは中衛の真面目な生徒となり、表向きはただアビトウアーに合格することだけを心がけた。

妹との会話の後、チエスの試合が加わった。これはあるまったく特定の計画のためで、チエスの試合はただ偽装のためにのみこの計画に組み込まれていた。重要なのは毎日リヒアルトのところへ出かけることで、みんなをこのことに慣れさせ、同時にウォームアップとして考えたものだ。ぼくは約四週間続け、準備が整った。

四月十五日、午後五時。家を出たとき、生暖かい風がぼくの薄手のコートをぐいぐいと引っ張った。「今日こそ」と、ぼくは不意に口にした。しかし、何一つ気づかれずに、いつものように出かけた。

九

アレクサンダー (非現実的な声で) 今日こそ、今日こそ、今日こそ。まず映画館のところに立つ、写真を見る。人びとに注意し、目立たないように。

ガラスの奥にクローデット・コルベールが微笑んでいる。

ガラスとは都合がいい。鏡になる。

ぼくはずっとクローデット・コルベールを見つめながら、通りの反対側に薬剤師の姿を見る。

彼の視線は暗記するほど良く知っている。その視線はど  
う言ったらいいのか？ 奥目で、うつろで、縁どられた  
虚無といったところだ。

だが、どうやらこの視線はまちがいなくぼくに気づいて  
いるようだ。ぼくにもっともらしく見せるために、ぼく  
に対して人目を引くものを目立たなくするために、中毒  
を考えついたのだ。かわいそうな奴だ、ぼくのために麻  
酔薬を針で皮膚の下に打たれなくちゃならないなんて！  
追跡者は残酷な奴だ！ 幻覚を維持するために、奴は手  
下どもを苦しめる。惨めな生活、それに加えて空腹、病  
気、苦悩。落ち着け！ 同情心なんか捕われるな。奴  
らは気づいていない、気づいていないんだ。  
そばかす娘。汚らしいブロンドの髪。鼻を写真ケースに  
押しつける。

目立たないように、先に進むこと。

子供の手を引いた婦人。

だらしのない、酔っ払いの老人。

今度は「橋頭亭」の主人だ。

アレクサンダー（いつもの声で） こんにちは！

主人 こんにちは。

アレクサンダー（別の声で） ぼくの二人の監視人たちの友人

だ。だから挨拶し、目立たないようにする。ばら色の肌  
と二重顎。賞賛めいたものがぼくの嫌悪感に混じってい  
る。女中は彼の愛人だ。かわいい黒髪がこんなばら色肌  
のオス豚と合体するんだ——想像するだけでむかむかす  
る。

それにしても、みんな可哀想なものだ。薬剤師にそばか  
す娘、婦人と子供、宿の主人と檻樓を纏った老人。自分  
たちがぼくのために生きているんだということをちよつ  
とでも忘れられれば、連中は嬉しいだろうに。さぞかし  
ご苦労なことだ。

落ち着け、同情は禁物だ、捕まるな。

今日こそ、今日こそ、今日こそは。

いまだ！

（教会の時計の鳴る音）

十

アレクサンダー 二歩歩いて、ぼくは突然その通りを離れ、あ  
る家の門を通り抜けて中へ入った。ぼくは石炭商の庭に  
いた。仕事人がひとり車に袋を積んでいた、娘が鉛筆と  
紙を持って小屋から出てきた、小屋はどうやら事務所の  
ようだった。彼らは動きながら固まったみたいだった。

ぼくは彼らの視線を受けながら駆け出し、壁際の材木の山に攀じ登った。背後で丸太が鈍い音を立てて転がり落ちた、ぼくは高みから脇道へ飛び降りた。

一瞬ぼくは立ち止まってホツとした。ここには人影は見えなかった。しかし、ぼくの背後で警報が鳴らされるかもしれない、と思った。

この道は良く知っていた、柵と石垣の間の歩道だ。排水路がその脇を走っていて、地面はいつも湿っていた。だからブーツや自転車、それに車の跡がついていて、監視が飽くことなく続けられているのだということをぼくに思い起こさせた。たつたいま飛び降りた石垣の向うは静まり返っていた。ぼくの靴跡が地面に深くついていた。急いでぼくは靴で痕跡を消した。

ふたたび体を起こすと、警報が始まった。それはかすかなためらうような物音のように聞こえた、押し殺したドラムの音に似て、同じ間隔だ。どの方向から聞こえてくるのか確かめようとしたが、どうやらあらゆる方向から聞こえてくるようだった。

もう潮時だった。ぼくはほんの三、四秒その場にいた、自分の企ての成功を危うくしなくてはならぬ、いま急がなければならなかった。

ぼくは建物が始まる右の方に走った。ドラムの音はいまさらに大きくなった、その音には何か隠された意図があ

ったのだが。走っているときに木の枝に触れ、このかすかな物音が警報をかき消してくれなかったときに、不審の念を抱いたのを覚えている。

ともかく、警報は何ひとつ目に見える効果を引き起こさなかった。建物の中で見たわずかな人々は、そんなことに無頓着のようだった。彼らはベンチに座ったり、ゆったりとした歩行を続けていた。ただひとり、ぼくがすぐそばを通り過ぎた男も、通路を掃いていて、庇のついた帽子の下で目を上げもしなかった。

片側に家の立ち並ぶ公園通りの家並みに向かって走った。走りながら、ぼくは家々を伺いながら、青いプレートに二三の家番のついた一軒を選んだのは、ただ一瞬の閃き以外の何ものでもなかった。

玄関のドアを通り抜けると、自分自身の考えに対する不信に襲われ、予定通りに階段を登って上の階のどこかへ行く代りに、裏口を抜けて庭へ走り出た。

二つの側翼の左の方を選ぶと、階段を二段登り、ある住居のドアを鳴らした。プレートにはニコデミと名前が書いてあった。これが誰なのか全然知らなかった。

大きな安堵感がぼくを襲った。決断のときが近いことはわかっていた。太鼓の音はかすかにしか聞こえなかった、たぶんそれは幻覚だったのかもしれない、それにしてもまだ聞こえていた。

家の中でドアの音がし、急ぎ足で足音が近づいてきた。ぼくは金縛りにあったように木材と郵便受を見つめていた。この背後に何が隠れているのだろうか？ 人間の代わりに、まだ一度も見ただけでもない、優しそうな、あるいは恐ろしい生き物がドアを開けたとしても、ぼくは驚かなかっただろう。

だが、ぼくの追跡者はどうやらこれまで通りのゲームをさらに続けるのが適切だと考えたようだ。戸口に現われたのは奴が遣わした青年だった、肌の白い金髪の。彼は上着なしで青いセーターでやってきた。親しそうに微笑んで、白い歯を見せた。そのことが白子ではというぼくの印象を強めた。

十一

アレクサンダー ごめんなさい、ニコデミさん、お邪魔いたします。

ニコデミ ご用件は？

アレクサンダー (微笑みながら) まさかいまの警報はご自分のことだとは思わなかったですよね。

ニコデミ 警報？ どんな警報ですか？

アレクサンダー あなたの方が良くご存知でしょ。ぼくのは太鼓のような音です。

ニコデミ なにも聞こえませんでした。

アレクサンダー だったらなお結構です。取り立てて重要だというわけでもありませんから。重要なのは、ぼくがあなたを突然訪問したということ、そして、あなたは心の準備ができていなかったということです。

ニコデミ あなたは住所を間違えたようですね。わたしの名前はニコデミといいます。

アレクサンダー 表札にそう書いてあります。

ニコデミ ということは！

アレクサンダー まちがいなくあなたのところに伺ったのです。

ニコデミ あなたを存じませんが。

アレクサンダー 率直に話し合いませんか！

ニコデミ いいでしょう！ 何を販売しておいでですか？ 絵入り新聞ですか？ 盲人教会の簿ですか？ 掃除機ですか？

アレクサンダー 入ってもいいですか？

ニコデミ おもしろい方だ。

アレクサンダー まあご随意に。

ニコデミ (二人は中に入りながら) それとも家庭教師でも？  
まだ学校に通っているのですよ？

アレクサンダー 今日が最後でした。

ニコデミ え？ 卒業もしないで？ それとも、もう休みが始

まりましたか？

アレクサンダー へえ——ここですか。

ニコデミ ええ、さあ周囲をご覧なさい！ あなたはわたしに

は滑稽なる聖人というところです。

アレクサンダー お許しくだされれば、座らせていただきます。

ニコデミ どうぞ。タバコは？

アレクサンダー いいえ、結構です。

ニコデミ そうですか、さあ周囲をご覧ください。そこにある

のはわたしの蔵書です、ほとんどが数学です。わたしは

保険計理士をしています。家庭教師料は時間三マルクで

す。もっともうかなり詰まっています。

アレクサンダー で、これがあなたの書面机ですね？

ニコデミ その通りです。あなたの推理力はたいしたもの

です。

アレクサンダー それ以上からかわないでください、ニコデミ

さん。

ニコデミ わたしもそんなつもりはありませんでした、ええ

と——お名前は何でしたか？

アレクサンダー 猫を被るのはやめてください！

ニコデミ 何だって？

アレクサンダー まるでぼくのことを知らないみたいに、猫な

んかかぶって。

ニコデミ 少々きつい言葉ですね。そう思いませんか？ あな

たには会ったこともありませんよ。

アレクサンダー 時間を稼ごうとなさっている、それだけのこ

とです。

ニコデミ 時間がなければ、本題に入ってください！

アレクサンダー アレクサンダーが何者か良くご存知でしょ。

(笑いながら) もしお望みなら、アレクサンダー小王です

よ。

ニコデミ つまり、あなたはアレクサンダーさん。それはファ

ミリーネームですか？

アレクサンダー もうたくさんだ、焦らさないでください！

そろそろ白状なさっては！ 否定しても全然意味ありま

せんよ。ドアをお開けになった時に、もうすでに気づい

ていたはずですよ。あなたは——保険計理士さん！

ニコデミ (面白がって) 楽しい晩になりますね。なにかわたし

の職業に異議でもおありですか？

アレクサンダー 取り立てて面白くありませんね。しかし、

これらが見え見えの盗品だつてことをぼくがすっかり見

抜いていることはお分かりですよ。保険計理士とアレ

クサンダーの遠征、市街電車、生物学、海の波と愛の波、

レンブラントの薄明と社会問題——どうかぼくの話こそ

らさないでください！

ニコデミ (当惑して) ふん。

アレクサンダー 「ふん」じゃ少し足りませんね。あなたはまだ

自分が安全で、いろいろな連関の中にいると感じておられる。ぼくの企てはもつと孤独です、そもそも最も孤独で、唯一の企てと云ったところですよ。チベットとかコンゴの泉など持ち出さないでくださいよ。

ニコデミ そんな意図はありませんでしたよ。

アレクサンダー ぼくの舞台は申し分ありません。で、あなたは、ニコデミさん、この世の童話の登場人物をみんな総動員して、アレクサンダーであれ、コロンプスであれ——みんながみんな伴を引き連れて。どこかに笑いが隠されていることはわかっています、彼らのために、それに彼らの行為のために。ぼくにいるのは監視人だけだ。動物や、木々や、家々でさえ怪しく見える、ちょうどあなたみたいに、ニコデミさん。さあ、さあ、あなたの依頼人は誰なのですか？

ニコデミ 安心しました、やっとなつかみ所のある話題にきてくれませんか。モンディアル保険会社ですよ。

アレクサンダー やめろ、畜生！ 何の罪もないような振る舞いをするな。その喜劇の後ろには誰が隠れているんだ？ 演出しているのは誰なんだ？

ニコデミ 誰が演出しているって？ いいでしょう、あなたがそういうつもりなら——わたし自身にも時々訪れる疑問ですから。

アレクサンダー あなたはその仲間なんですよ。

ニコデミ わたしが？ どうしてよりによってわたしがですか？

わたしを買いかぶっておいでだ。世界の七不思議の答え、ああ、なんと言おうことだ——思ったほど面白くなりそうもないな。できればまた改めて来ててください。まだ来客があります。

アレクサンダー 改めてねえ、そうなさりたいんですね。いえ、ぼくはまだここにいます。誰を待っているのですか？

ニコデミ もう結構です。

アレクサンダー 誰を待っているのですか？

ニコデミ 本当に知りたいのであれば、教えてあげましょう、依頼人です。

アレクサンダー (嬉しそうに) 奴を？

ニコデミ あなたを中に入れたのは間違いだった。

アレクサンダー いいや、もちろん奴は来ないさ。奴はいつだって自分の人形を身代わりにするんだ。だが、針金は、真実は、さあ言うんだ！

ニコデミ もう気づいたでしょう、わたしにだってあなたと同じように目もあれば、耳も、口も、両手もあるのです。不思議なことに、しかも同じ言葉を話す。で、あなたはわたしが事情に通じていると言われる。もつともわたしは泥と埃しか残りませんがね。

アレクサンダー 違いますね。

ニコデミ よろしい、だったら話はまた別だ。だったら、あなたもその欺瞞にかかわっている。あなたに残っているのは泥と埃だけで、あなたが口にするのは真の言葉でも唯一の言葉でもない。

アレクサンダー つまらないことだ——だけど、ぼくはそんなことでは満足しません。

ニコデミ ああ、何てことだ。

アレクサンダー さあ、どうです？

(ベルの音)

ニコデミ お客だ。

アレクサンダー お客だつて！ 対抗手段ですね、わたしがそんななことを知らないでも？

ニコデミ さあ、帰ってください。よろしければドアを開けてあげますよ。

アレクサンダー (鋭く) いいえ、結構！

(ベルが鳴りつづける。フェードアウト)

## 十二

(別の空間)

アレクサンダー 自由だ、とぼくは思った、自由だ、自由になったんだ！

レベッカ (すすり泣きながら) アレクサンダー、わたしのかわいいい兄さん。

アレクサンダー 事件については知ってるよね。

レベッカ 何もかも兄さんの作り話だったんでしょ！

アレクサンダー ぼくが考えていた通りだ。おまえは泣いて、何もかもぼくの作り話だろつてぼくに尋ねる。ゲームはさらに続けられる。小休止、これがぼくの獲得した最高のものだ、そしてぼくはそんなものじゃないと思ってる。計算違いだったのさ、レベッカ、何もかも間違っていたんだ。

レベッカ わたしが兄さんを助けてあげるわ。

アレクサンダー 最初は、だけど、ぼくはすべてを達成したと

思った。一瞬の間ぼくは幸せを感じた、そしていま、自由というものがいったいどういうものなのかも分かっている。だけど、それからは？ 階段はまだ続いていて、もっと下っていくことができることに、ぼくは早くも驚いたんだ。壁は崩れ落ちるはずじゃなかったか？ 星座とカスターニエンの美しい錯覚の代わりに、真実が見えるはずじゃなかったのか？ ぼくは、だつて、ガラクタをすべて破壊して、人間をナイフで突き刺し排除したんだ。歴史、文化、歯磨工場、人口政策——そんなものは何もかもこれ以上演じる必要などなかった。それからぼくは通りに出た、自動車が走っていた、ぼく自身のほか何

も変わってなかった。

レベッカ 何もかも兄さんの作り話だったって言いなさい。

アレクサンダー それが一時間前のことだった、そしていま、

ぼく自身も何も変わらなかったのだと確信している。

レベッカ わたしが助けてあげる。

アレクサンダー ニコデミの言う通りだった。しかも、彼の血

はぼくのとまったく同じに見える。これはどういうこと

なんだ？ 欺瞞を真実とみなす、それが一番簡単なこと

なんだろうが。そうすれば、すべてはうまくつながら

さてと、ぼくはいま、事柄全体をどう考えなければなら

ないか知っている。ぼくは馬鹿なことをした、しかし、

まったく無駄だったわけじゃない。

レベッカ 恐ろしいことだわ、兄さんの話は事態をもっとひど

くするわ。兄さんは冷酷な人なんかじゃないのに、アレ

クサンダー！

アレクサンダー 冷酷さ。

レベッカ ああ、アレクサンダー！ 言うのよ——

アレクサンダー すべてお前の作り話だった、つてな。

(呼び鈴が鳴る)

レベッカ 兄さんを助けてあげるわ。わたしたちよく考えてみ

なくちゃ——

アレクサンダー 今度こそ、ドアの前に誰が立っているのか、

ぼくにはわかる。すべてはゲームの規則に厳格に従って

進む、そのことをぼくはあてにできる。未決拘留、精神

病院。それを計算できることが、本当に気が楽なんだ。

(呼び鈴フェードアウト)

### 十三

判事 それでは。今日の尋問は終わりにしましょう。もし何か

個人的なことでありましたら——

アレクサンダー いいえ、結構です。

判事 わたしの言っているのは、この逮捕に関してですが。こ

こまですべて問題ありませんか？

アレクサンダー 問題ありません、どうも。

判事 何かお望みは？

アレクサンダー ええ、望みでしたらひとつあります。

判事 何でも言っつてごらんさい。

アレクサンダー 時間がかかりすぎです。あなたはぼくをもう

一週間も尋問しています。

判事 訴訟を引き延ばすためではありません。疲れませんか？

アレクサンダー いいえ。単純な事件でしょう？

判事 構成要件からすればそうです。しかし、心理的な点

が。われわれとしてはあなたに何が不利かだけでなく、

何が有利かということも知りたいのです。

アレクサンダー ぼくも同じ疑いを抱いています。あなたはぼ

くをいたわって下さる。何のために？ 疲れはしません、神経質じゃありませんから。殺人をつまらないものにしてしまうのですね。

**判事** わたしにはあなたが審理手続の客観性について苦情を述べているように見えますが。

**アレクサンダー** その通りです。

**判事** そんなことはめったにはありません。

**アレクサンダー** これがそのケースだということです。

**判事** あなたのために法や法施行の原則を変えることはできません。

**アレクサンダー** こういったことすべてはぼくをますます不信にするだけです。根本的には、ぼくがニコデミに対して抱いているのと同じ疑いです。彼は死ぬ必要などなかったのです、ぼくよりずっと強かったのですから。

**判事** (ため息をついて) つまり、わたしにさらに尋問を続けさせようというのですね。

**アレクサンダー** 構成要件でさえ完全には解明されていません。

**判事** これまでもそう主張されている。

**アレクサンダー** 腹を立てておられるんですね、判事さん。どんな形でのお詫びもします。ぼくには大変なことなのです、つまり、戦術を変更するというのです。

**判事** (やさしく) 戦術のお詫びというわけですね。

**アレクサンダー** とんでもない。どんな戦術も無駄だとわかったのです。あなたの親切なやり方に決して鈍感なわけはありません。人間的理解、たぶんそう言えるでしょう。もつとも、ぼくにはすべてが八百長試合だといことは分かっていますけど。

**判事** わたしは誰と勝負しているんです？

**アレクサンダー** 黒幕が誰かなどという問を繰り返すつもりはありません。ニコデミは保険会社だと言いました。あなたは法務大臣だと言われるでしょう。

**判事** それとも神様だね。この点では結果は同じです。

**アレクサンダー** いずれにしても奴に関する件は自分で処理しなければならぬことは分かっています、それに、奴にどうやらせるかも分かっています。そんなことは二の次で、尋問とは関係ありません。それはそれとして、ぼくはこのゲームに参加しなければならぬと悟ったのです。

**判事** だとすれば、あなたのこれからの人生に本当に役立つでしょう。

**アレクサンダー** これからの人生ですって？ ぼくは処刑されるんじゃないんですか？

**判事** 処刑？ 誰が処刑などと言っています？

**アレクサンダー** ぼくの容疑はぼくの確信にあります。ぼくは自分の周囲に向かって時々、ゲームのトリックを見破っ

たぞとはつきり言ってしまおう、それが自分の欠点だということとは認めます。

判事 そう、あなたはもう何度もそう言いました。

アレクサンダー（微笑んで）何度も！　そういうたちの悪い非難を当然あなたもぼくにぶつけ、傷つけるんだ。

判事 決してそんなつもりはありません。

アレクサンダー つまり、ニコデミは――

判事 残念ながら、逸脱の方がわたしには重要に思われる。

アレクサンダー ニコデミは簡単にぼくを払いのけることができたでしょう。しかも彼は、ぼくが紙切鋏を手を取ったのを間違ひなく見ていた。

判事 ちょっと質問をはさませてください、あなたはいつ紙切鋏に気づいたのですか？

アレクサンダー 部屋に入ったとき、ぼくはあたりを見回しました。あるいはその時に紙切鋏も見たのかもしれない。

判事 その時何も考えずに？

アレクサンダー ぼくは目で見た対象はどんなものについても大体同じことを考えます。

判事 というと？

アレクサンダー なんて贅沢なんだ！　と。

判事 紙切鋏ですか？

アレクサンダー でっち上げ、歯車のかみ合わせ、かみ合わせ

の合致、そして紙切鋏にたどり着く。しかも、すべてはひとつの目的に――

判事 目的とは？

アレクサンダー 以前だったら、ぼくを欺くため、と言ったのでしょうか。

判事 では、今は？

アレクサンダー（笑う）紙を切るため。

判事 事実それが紙切鋏の目的ですからね。

アレクサンダー やはり馬鹿げていると思いませんか？

判事 いいえ。あなたの考えが進歩したのだと思います。

アレクサンダー ぼくにとつて、世界というのは比較的単純なものです。しかし、ぼくは別の見方もできるんです。

判事 あなたは真剣なんだと思っていました。

アレクサンダー（愉快そうに）全然そんなことはありません。

判事 いずれにしても、あなたは後になって初めて紙切鋏が武器として使えるという考えに至った。

アレクサンダー 後になって初めてです。（用心深く）紙切鋏がすでに武器として作られたということももちろんあります。

判事 石ころやハンマーだって武器として使えます。

アレクサンダー 石ころでもハンマーでもありませんでした。

紙切鋏だったから、すべての紙切鋏はこの瞬間のために作られたのでは、という疑念がすぐ念頭に浮かぶので

す。

判事 保険会社か法務大臣、あるいは神様によって、ね。

アレクサンダー (快活に) からかうがいいんです。

判事 呼び鈴が鳴り、ニコデミが戸口のところへ行くこうとしたとき、あなたは彼を阻止しようとしたか？

アレクサンダー もちろんそのつもりでした。

判事 脅して阻止しようと。

アレクサンダー 脅して阻止しようと。

判事 手近にあった物を手にとつて――

アレクサンダー 紙切鋏を取りました。

判事 石ころかハンマーでもよかったのでは――

アレクサンダー 石ころもハンマーもそこにはありませんでした。

判事 そのかわりに紙切鋏があった。あなたはその瞬間ひらめいて、それを手に取った。

アレクサンダー (いらいらして) そういうことです。

判事 よろしい。

アレクサンダー つまりニコデミは抵抗して、ぼくを払いのけた、しかし、ぼくはまた彼に向つていった。彼はぼくよりもはるかに力が強かった。彼はぼくの両腕を締め挙げた、ぼくの負けなものはもともと明々白々だった。ところが、不意にぼくは彼がぼくを放したのに気づいた、いや、放したんじゃない、だけど、つかむ手がゆるんだ、ぼく

はぐつと体を引くと、自由になった、そこで――

判事 あなたは疑念がひとつあるって言いましたね。

アレクサンダー この手のゆるみがそれです、これは誘い手だったと言いたいですね。

判事 ほほう。

アレクサンダー すでに言いましたが、この話をするのは、ただぼくがこのゲームのからくりを見抜いていたことをあなたに示すためです。

判事 それにしても、もう少し詳しく話して下さい――

アレクサンダー つまり、これもゲームのうちだったんです。

判事 なにが？

アレクサンダー ニコデミはぼくに殺されるようにという指令を受けていたのです。

判事 だから？

アレクサンダー だから、誘い手をみせたのです、握る力をゆるめたのです。それを見抜くのが遅すぎました。そう、

ぼくは状況を支配しているのは自分だと思つていました、ニコデミやほかの連中を出し抜いてやった、と。しかし、ぼくがあの時考えたことなどこの間にもうどうでもよくなつてしまいました。

判事 いずれにせよ、ニコデミが心臓を病んでいたことは確実です。

アレクサンダー え？

判事 彼はちょうど発作に襲われた、と考えられます——

アレクサンダー 心臓発作ですって！ あなたがたはそのことをも予測して備えていた、と言うのですか！ ぼくが彼を殺したときには、彼はすでに死んでいた、今頃になってそう言えば、それで成功というわけだ。

(突然引きつったように高笑いする。)

(フェード・アウト)

#### 十四

精神科医 教科書にあるようなケースですな。注目に値するのは執拗さという点です。

アレクサンダー (あくびする)

精神科医 お疲れですね。今日はこれで終わりにしてもよろしいよ。個人的なことで何かありましたら——

アレクサンダー いいえ、結構です。

精神科医 収容に関してなんですが。これまでのところ万事問題はありませんか？

アレクサンダー ナイフもフォークもグラスもなし、窓には格子が嵌まっている。万事異常無しです。

精神科医 まあ、そうですね、療養所はもちろん家のようなわけにはいきません。

アレクサンダー もちろんですとも。

精神科医 慰めになればいいのですが、わたしの見るところでは、あなたの件は好調ですよ。

アレクサンダー あなたが好調と言われるとすれば、十分悪いわけですね。

精神科医 わたしが救い出してあげます。パラノイアです。それで切り抜けますよ。

アレクサンダー どうもありがとうございます。

精神科医 何か望みは？

アレクサンダー あなたがこの件を速めてくださるといいんですが！

精神科医 速める？

アレクサンダー すぐにも尋問を続けてください！

精神科医 われわれには筋書きがあります、自分の役割というものがある。それに、あなたが唯一のケースというわけでもありません。それに書類を作る仕事も。何事も書類にしなければなりません。あなたのために例外ということ——

アレクサンダー あなたもぼくに対してとても親切です。みんながぼくに対してとても親切なものだから、ひどく惨めな気持ちになります。

精神科医 本当はもうひとつだけお聞きしたかったのだが。

アレクサンダー (希望をいだいて) どうぞ、聞いてください。精神科医 陰謀だ、とあなたは言いました。もちろん、そう考

えることもできます。

アレクサンダー でしょう？

精神科医 しかし、いつそれは始まったのでしょうか？つまり、

あなたはそのことにいつ気づいたのですか？

アレクサンダー 一年半ほど前です。ぼくの十六歳の誕生日の直後です。

精神科医 まったく突然に、ですか？

アレクサンダー 怪しい兆候にはすでにその前から気づいていました。

精神科医 で、その時何か特別なことが起きた？

アレクサンダー 何か特別なことが起こったわけではありません。ん、いいえ、全然目立つようなこともなくです。もしすでにその時不審を抱いていなかったら、見逃していたでしょう。

精神科医 (さりげない態度で。彼はそれを洗練された態度と  
思って) ええ、よくわかります。

アレクサンダー ある朝目がさめると、ちょうど明るくなり始めたところでした。ひどく胸騒ぎがして、起き上がる  
と、服を着ました。家のものはみんな眠っていた。ぼくはバルコニーに出た。地平線は明るんでいた。公園では  
アムゼルが鳴いていた。空気は冷たく、同時に恐怖と壮麗  
とに満ちていた。恐怖と壮麗に満ちていたのです。その時、ぼくにはわかったのです、ぼくが生きている限り、

こんな時間などありえない、と。それはぼくに割り当てられたものではなかったのです。ただぼくの監視人の不注意で——(言葉を切る)

精神科医 どうしたんです？

アレクサンダー などなです。

精神科医 一種の自然の気分ですな。

アレクサンダー まったくその通りです、自然の気分です。(あくびをする)

精神科医 ではこれまでにしましょう。それに、たぶんまだあなたの妹さんが外でお待ちでしょう。こちらの方があなたを元気づけてくれるでしょう。

アレクサンダー 自然の気分、——この境界の内になんという多くの可能性がまだのこっていることだ！ 全体としてはモチーフの恐ろしいほどの浪費です。

精神科医 (理解できないまま) そういうことですね。

アレクサンダー 賞賛に値する。しかし、それも権力の充満によつて同時に相殺されてしまう。

精神科医 その通りです。

アレクサンダー それでもなお敵手はいます。

精神科医 どういうことですか？

アレクサンダー ぼくの妹、とおっしゃいましたか？

十五

レベッカ いい知らせよ、アレクサンダー！

アレクサンダー 来る日もくる日もいい知らせだ。長い間には、甘すぎる食事ということになる。だんだん身震いがしてくる。いいことって何だい？

レベッカ (悲しそうに) 兄さんにはその方がいいって言うなら、悪い知らせでいいわ。

アレクサンダー 予審判事は無罪判決が期待できるってほめかすんだ。精神科医はほくが無邪気そのものだとみなしている。どんなニュースを持ってきたんだい？

レベッカ わたしたち弁護士としてブランド博士を雇ったのよ。

アレクサンダー (冷淡に) はは——。

レベッカ 有名な刑事訴訟弁護人よ。彼の名前を知らない？

アレクサンダー いや、だけどそんなことどうでもいいさ。

レベッカ わたしたちこの件に関して彼に関心を持たせたのよ。

アレクサンダー こんな単純な事件は国選弁護人で十分だ。彼は高いんだらう？

レベッカ 決まった法定料金があると思うわ。でも、それもどうでもいいことだわ。

アレクサンダー ありがとう。

レベッカ 両親が言ってたけど——

アレクサンダー 精神病院へ収容されれば、それで済むんだぞ。

レベッカ こんな事件にはお金など何の役にも立たないって。

アレクサンダー どんな事件なら役に立つんだ！

レベッカ これがいい知らせよ。

アレクサンダー そんなのは悪い知らせってばくなら言うかも。

レベッカ ブランド博士が言うには——

アレクサンダー ぼくの言う通りだって言うのだから？

レベッカ 実に些細な災難だから、兄さんはまさか永久にってわけでは——

アレクサンダー そうさ、永久じゃない、きっと違う。ああ、

レベッカ、レベッカ！

レベッカ そんなに悪いこと？

アレクサンダー 確かに、実に些細な災難さ。で、ニコデミ

は？ 無駄死にしたんだぞ、まったくの無駄死にだ。だんだん彼がかわいそうになってきた。

レベッカ だとしたら結構なことだけだ。

アレクサンダー お前がそばにいと、いつもぼくは感じやすくなる。お前は誘惑なんだ、レベッカ。

レベッカ いつもそばにいてあげるわ、アレクサンダー。そう固く決心したの。兄さんは世界を信じるようになるわ、

可能な限り幸福になれるわ。

アレクサンダー そうかい？

レベッカ わたし、兄さんのためだけに生きるわ。

アレクサンダー お前の正体はしれている。

レベッカ どうして？

アレクサンダー ぼくのためだけ。それこそぼくがお前を責める点だ。

レベッカ 兄さんは何でも自分なりの解釈をするんだから。

アレクサンダー ぼくはほかに望みもなかつたんだ。ぼくたちは

どうすればいいんだろうね、レベッカ？

レベッカ 例えば——（思索する）——例えば、旅行。

アレクサンダー どこへ？

レベッカ メキシコ。

アレクサンダー それともニュージールランド。

レベッカ あそこは退屈だつて聞いたわ。

アレクサンダー ジャワ。

レベッカ セイロン。

アレクサンダー サハラ、アフリカ内部、パタゴニア、どこだ

つて同じだ。

レベッカ みんな違うわ、アレクサンダー。

アレクサンダー ぼくらは船や列車や飛行機に乗る、すでに書

割の準備はできている、やしの木、ピラミッド、イースター島の巨大石像、——ああ、なんてことだ、あらかじめ

そんなものを！ 男が入場券窓口から身を乗り出し、インフォメーションをくれる。航海士が忙しげに針路を維持する。税官吏が荷物検査をする。波が動員され、突風が吹き荒れ、世界劇場が始まる。

レベッカ 見方次第ね。

アレクサンダー それをどう見なければいけないか、いま分かつた。

レベッカ 見方次第ね。

アレクサンダー それをどう見なければいけないか、いま分かつた。

レベッカ いつも兄さんは「いま分かつた——」つて言つてたわ。

アレクサンダー 当然さ。いつもわかつたんだから。しかし、

今度のアクセントは「見る」にあるんだ。イメージだ、分かるだろう！

レベッカ いいえ。

アレクサンダー ぼくは何もかもあまりにも固定的に想像して

いた。円の中心、地面に打ち込まれた一本の杭。杭は、

繰り返し別の場所に打ち込まなくちゃならないんだ。それにはもちろん多少時間がかかる。だからぼくはまちが

つてしまった、スピードが十分速ければ、ぼくはその円

から離れることもできるのに。世界の認識というのは一

種の陸上競技のようなものだ。

レベッカ ああ、アレクサンダー、旅行の話をしませうよ。

アレクサンダー その話もしてるのさ。例えばメキシコ。ポ

ポカテペトル火山ができる以前の壮大な無を見るには、

いくら早く出かけても早すぎることはない。どうしてそうなのか？

レベッカ そんなことは全部まずやり過ぎて、わたしたちは一緒に――

アレクサンダー（動じないで）ぼくの新しいイメージがすべてを解き明かしてくれる。それはランタンだ。いいか、レベッカ、ぼくはまるでいつもランタンを持ち歩いているようなものだ。ぼくの周りに一個の円が明るく照らし出されている、一定の直径、一定の広さの円だ。ぼくはさらに進む、ランタンは別の対象を照らす、ピラミッドを照らし、メキシコを照らす。しかし、直径は変わらない、広さは変わらない、どこへ行こうと、ぼくはその円の縁に一ミリたりとも近づけない。

レベッカ 何のためなの？

アレクサンダー そこからすべてがはじまるからさ。

レベッカ（ため息をつく）

アレクサンダー ニコデミはもちろんすでに明かりの真ん中に立っていた、ところがぼくは円から走り出れば、暗闇の中で彼に出会えると思っていた。逃げ出す可能性などないのに、絶対に。それとも、ある？ どう思う、レベッカ？

レベッカ（押さえきれず）くだらないこと言うのはやめて！ランタンなんか放り出すのよ、もしお兄さんがそういう

言い方をしたいのなら、消すのよ、吹き消すのよ、フツと消すのよ。

アレクサンダー（勝ち誇って）まさにそうぼくも言いたかったんだ。おまえはぼくのことを分かってくれたんだね、レベッカ、おまえが妹だということに誇りに思うよ。

レベッカ とんでもない、いったいまた何をわたしが正しく理解したって言うの？

アレクサンダー ぼくはもう一度合法的な試みをするつもりだ。そんなのは全然見込みがないから、ほんとは冗談だと言ってもいいのだけど。だけど、ぼくの虚栄心って奴は治しようがないんだ。ぼくにとつて大事なのはいつだって、自分がすべてをどんなに見抜いているかを示すことなんだ。

## 十六

アレクサンダー いい天気だ。鉄格子が朝日にあたって装飾文様を作っている。工芸品だ、だとすれば、もしかして何か意味があるのかも。

判事 だが、あなたの見方からすれば、すべて書き割りに過ぎない。

アレクサンダー いきなり本題ですか？

判事 あなたは上機嫌で、ほとんど楽しんでる。

アレクサンダー ただ心配なのは――

判事 何ですか？

アレクサンダー この楽しさがいつまでもぼくのところにどど

まるかです、そっくりそのまま。

判事 わたしの分はなしですか？

アレクサンダー 全くなしです。

判事 (ため息をつく) 何か新しいことでもありますか？

アレクサンダー 新しいことと言えば、例の真実です。

判事 それはもうわれわれは手に入れたのでは？

アレクサンダー いいえ、これまですべては逆でした。

判事 え、何ですって？

アレクサンダー 何もかもが騙し、ペテン、嘘でした。撤回し

ます。

判事 あなたの供述をですか？

アレクサンダー すべてを。

判事 どこから始めましょう？

アレクサンダー 思ったほど動じないんですね？

判事 わたしの心の動きなど重要ではありません。がっかりし

ましたか？

アレクサンダー (芝居がかって) 真実のために――

判事 はあ！？

アレクサンダー 殺人の問題なんですよ。

判事 それはやがて明らかになります。わたしたちは事実につ

いて話しましょう。どの点であなたはこれまでの供述を撤回されるのですか？

アレクサンダー すばらしい！

判事 何のことですか？

アレクサンダー どの点であなたはこれまでの供述を撤回されるのですか？ うっとりする文章だ。そんな風にぼくは

本当は取調べ全体を想像していたのです。

判事 (腹を立てて) 大事なものは正確な問いです。

アレクサンダー それじゃ調書向けに。ニコデミ殺害はぼくが

ずっと以前から計画し、細部に至るまで準備したもので

す。

判事 つまり、あなたはニコデミを知っていた？

アレクサンダー 顔だけは。彼がメリデイス嬢と親しい関係

にあることはわかっていました。

判事 で、あなたの言いたいのは――？

アレクサンダー 嫉妬です、そうです。

判事 メリデイス嬢の証言では――

アレクサンダー ぼくがニコデミのアパートのドアを開けた

時、彼女は初めてぼくの姿を見たのです。おそらく。

判事 矛盾をどう説明しますか？

アレクサンダー 矛盾などありません。ぼくは本当にメリデ

イス嬢を知っていたのですから。

判事 しかし、彼女とは一言も言葉を交わさなかった。彼女

はあなたに気づきもしなかった。

アレクサンダー 遠くから思いを寄せる恋だったのです、希望のない。何も生まれなかったのです。

判事 ふむ。

アレクサンダー それからぼくは、彼女がニコデミを訪れていることに気づきました。このことでぼくの心は完全に打ち砕かれたのです。

判事 前の供述では――

アレクサンダー すべて撤回します。

判事 紙切鋏は？

アレクサンダー ぼくはハンマーを持って行きました。しかし、その後で紙切鋏の方が適当なように思えたのです。

判事 武器としてですか？

アレクサンダー 証拠物件としてです。激情、全体の偶然性を証明してくれますから。それを手にしたのは、ただ手近にあったからです。ハンマーだったら、殺人計画だったということになります。

判事 だからあなたはそれを使わないで――

アレクサンダー 再び道具箱に戻すことが出来たんです。

判事 つまり、あなたは最初はまったく自分の動機と犯行準備を隠すつもりだった。

アレクサンダー そうです。

判事 いいですか、あなたは成功してたんですよ。

アレクサンダー 成功していた？

判事 (慎重に) そう仮定しましょう。

アレクサンダー なぜぼくが今になって簡単に自白しようとするのか、お聞きになりたいのでしたら――

判事 だれもあなたに不利な証言をしていないのに、どうして自分から不利な証言をするのか――

アレクサンダー どうして足下の土を取り除いたり、腰掛けている杖を切るようなまねをするのか――

判事 まさにそのことです。

アレクサンダー 真実のためです。

判事 ふむ。

アレクサンダー 大袈裟すぎますか？

判事 少し。

アレクサンダー それと健康の問題です。この施設は気に入りません。ぼくは監獄の方が――だっておそらく監獄っていうことになるのでしょ？

判事 それは裁判所の事柄です。わたしは専ら取り調べをするだけです。

アレクサンダー 専ら、ね。まあ、どちらにしても、ぼくは監獄の方がもしかしたら少しはましかもしれない、と思っただのです。ここよりひどいはずはない、と。

判事 ふむ。

アレクサンダー これでも満足してもらえませんか？ 残念で

す、これ以上ぼくが提供できるものではありません。

**判事** なぜあなたはまっすぐニコデミのアパートへ行かなかつたのですか？

なぜ石炭商や連絡路を経て、公園を抜けるなどという回り道を？

**アレクサンダー** その人たちが全員、ぼくの動揺に気づいてくれていたらいいのですが。

**判事** ありえます。

**アレクサンダー** ところで、それもすべて細部にいたるまで

め考えたことです、錯乱を装い、責任能力のないことを証明するために、必要だったのです。

**判事** で、あなたの世界観、あなたの哲学全体は？

**アレクサンダー** 四月、四月！

**判事** 冗談はお止めなさい。

**アレクサンダー** ちょうど止めようとしていたところなのに。

でも、あなたがまるでそれを残念がっているように、ぼくを見つめるから。

**判事** わたしは調書をとっているのです——いうなれば、冷静に。

**アレクサンダー** 言うなれば、ですか。このぼかげた空想、こ

の中途半端な思春期というやつがぼくのものだとされて、少し傷ついています。あなたは、ぼくが自分のこと

を世界の中心だと、数千年の歴史をまったくのナンセン

スだとみなしている、と本気で思っているのですか？

**判事** あなたは有能な人だと思っていましたよ。

**アレクサンダー** ぼくを馬鹿だと思っていたのでは？

**判事** 好きなように！

**アレクサンダー** 過去形ですね。もう何も望むことはありません。

## 十七

**アレクサンダー** ぼくにはもう何も望むことはない。自由にな

るために退位した王様たちのことを聞いたことがある。

あの謁見ときたら！ 廷臣ども、式部官、陰口屋ども！

彼らが続々とやってくる。調書、判決、署名、すべては

道徳的に確固たる理由をつけられて。人が入ってきて、

この世界の存続のために働き、ふたたび退場する。もし

誰かが紫の褥から立ち上がり、彼らを嘘つき呼ばわりしたら、なんてすばらしいだろう！ ぼくにも謁見のため

の玉座があり、広間がある。事はいま進行中だ。ぼくのことなど必要としていない、しかし、もしぼくに尋ねれば、もつともらしく見える、その方が目立たない、というわけだ。立憲君主制だからな。

## 精神科医

あなたは刑事犯罪の一ケースに過ぎないなどわたしは思っています。あなたはわたしの守備範囲にいる

のです。わたしは自分の境界を良く知っていますから、騙されたりしません。

判事

あなたはどう説明しますか、ニコデミとメリディース嬢の關係などまだ話題にもなっていないかったときに、ご自身で言われているように、自分は狂気だと言われた、従って、あなたには嫉妬や殺人計画を偽装する理由などありえなかつたはずですが。

レベツカ

兄さんがこの自白で引き起こした結果はひどいものよ。ブランド博士は弁護を降り、兄さんが自分を裏切つたって怒ってるわ。彼は訴訟依頼人と――

精神科医

患者です――

判事 被告人です――

レベツカ 兄さんだわ――

母親 息子です――

レベツカ その前はすべてが比較的単純だったのに。

精神科医 わたしはあくまでパラノイアだと思えます。

判事 わたしはあなたの自白を疑っています。

レベツカ 幸い彼らはいつともは善意のひとたちなのよ。わたし

たち新しい弁護士を雇つたのよ。彼もとっても良い護士

士だそうよ。兄さん――

母親 息子――

判事 被告人――

精神科医 患者――

アレクサンダー さてそこで、ドアを閉め、鍵をまわす！ わ

が国民の然るべき男性、そして女性方――あなたたちには存分に称賛の品が与えられだろうさ。一級、二級、三級の嘘に対する勲章だ、サスペンダー勲章、ガーター勲章、ブラジャー勲章を。ありがとう。ぼくは退位する。（間を置いて、大声で叫ぶ）ぼくは退位する。（一瞬沈黙し、そのあと落ち着いて話す）ぼくの命をめぐってこれほど多くの努力が！ 彼らは首尾良くことを成し遂げ、ぼくの命は救われた。救われなければならなかつたのだ。奴はそんなことを恐れる必要などない。しかし、ぼくは奴を追い詰めてやる、奴がぼくのところへ手下を送ってよこすのを阻止してやる。ぼくが求めているのは奴自身だ。隠れ家から出て来い！ ガラスのかけら一枚でだつて奴を誘い出してやるさ、洗濯紐一本でだつて。奴にはぼくの命が必要なんだ、だからぼくの死を恐れている。これはぼくの力になる。そうすれば奴は自分の影から出て来て、ぼくと面と向かわざるを得なくなる。ぼくは奴の言葉をマスターし、奴に自分の秘密を打ち明けさせてやるとも。

解 題

ここに訳出したのは、ギュンター・アイヒの放送劇「フィリドールの防衛手」(*Philidors Verteidigung*), 1958)である。アイヒの覚書によれば、この作品は一九五八年一月十三日及び二月十二日から二十一日にかけて執筆された。北ドイツ放送(NDR)に採択されたが、アイヒによって撤回され、のちに南西ドイツ放送(SWF)から問い合わせがあったときにも、制作許可は出されなかった。初放送は死後、一九七三年に全集が公開された後の一九七三年十二月十二日、西ドイツ放送(WDR)から演出ラオウル・ヴォルフガング・シュネル(Raoul Wolfgang Schnell)による。新制作は一九七七年十二月十二日、西ドイツ放送、演出ハインツ・ホストウニヒ(Heinz Hostnig)‘および一九七七年十二月三日、チューリヒ・スイス放送局(ERG-Zürich)、演出ハンス・イエトリシユカ(Hans Jedischka)による。全集第四巻の散文断片「策謀」(*Verschwörung*)との間に、いくつかの個所で単語の異同が見られる。

アイヒはこの作品を自分の妻と何人かの友人に見せたことがあった。彼らの意見で自信をなくし、この仕事を放置した。ウンセルト宛ての一九六四年一月二十四日の手紙によると、数年後に彼は「別の言葉で 放送劇四篇」(*In anderen Sprachen. Vier Hörspiele*)への収載を検討した。しかし、「フィリドールの防衛

手」の代わりに、このとき完成したばかりの「ベルを鳴らしてもらう」(*Man bitter zu läuten*)が採録された。

訳者あとがき

本訳稿に用いたテキストは：

Günter Eich: *Gesammelte Werke in vier Bänden, Revidierte Ausgabe, Band III, Die Hörspiel 2*, Hrsg. von Karl Karst, Suhrkamp Verlag, S.419-450, 1991

による。なお、「解題」は上にあげた全集版第三巻、巻末の編集者による「註およびギュンター・アイヒの放送劇および放送台本の年代別総索引」から、関係部分を訳出し、文章の一部を加筆修正した。

共同作業はまず前半および解題を竹中、後半を新津が分担し、それぞれの草稿を作成した。その後草稿を交換して訳文の検討修正を行った。ただし、本訳稿についての最終的な責任は竹中が負うものとする。

(二〇〇一年一〇月二〇日)